

玉兔（玉兔月影勝）

へ実に 楽天が唐詩に つらねし秋の名にし負う 三五夜中 新月の
中に餅つく玉兔 餅ぢやござらぬ望月の 月の景勝

へ飛団子 やれもさうや、れやれさてな 白と杵とは女夫でござる

やれもさやれもさ 夜がな夜ひと夜 お、やれ と、んが上から月夜に
そこだぞ やれこりや よいこの団子が出来たぞ お、やれ

やれさて あれはさて これはさて どつこいさてな よいと
／＼よいとなとなへこれわいさのよいへこれはさておきへ昔々やつ
がれが 手柄を夕べの添乳にも ば、喰た ぢ、やがその敵 うつや
ぽんぽらぽんと腹鼓 狸の近所へ柴刈に きやつめもせたら大束を
えつちり／＼ えぢかりまた シヤござんなれ こ、こそと 後から
火打で かつ／＼ かつ／＼ かつ／＼ へかちかちの山と 云ううちに
へあつつへあつつ へそこで焼傷のお薬と 唐辛子なんぞで みしら
して へ今度は猪牙舟 へ合点だ へ心得狸に土の船 面舵取舵ぎつち
らこ 浮いた波とよ山谷の小舟 焦れ焦れて通わんせ こいつは面白
おれさまと 洒落る下より ぶく／＼のう／＼これはも泣ッ面
よい気味しゃんと 仇討 それで市が栄えた 手柄話にのりがきて
へお月様さへ嫁入りなさる やつときなさろせ とこせ／＼年はおい
くつ 十三七ツ へほんにサア お若いあの子を生んで やつときなさ
ろせ とこせ／＼ 誰に抱かせましようぞ お方に抱かしょ 見てもう
まそうな品物めへしどもなやへ風に千種のはなうさぎ 風情ありける
月見かな。